

太平記忠臣講釈

七条河原の段

都の雪は冷たきに、分けて冷たき立君の、憂き勤め。諸事の哀れを調へる夕暮毎に打ち連れて、身を売りに出る厚化粧、白壁作りの蔵屋敷は、薬師寺治郎右衛門が七条の一構へ、惣嫁三代売れ兼ねる、材木小屋の普請場が、十文つゝの揚屋なり。

「コレお君殿、この様に雪が降つて、今夜は定めて淋しかろ」

「オ、お百殿の、夕べはわしもお茶引いて親方の臆れつら。したがごなたは商ひをようするが、どうぞ秘伝があるかいの」

「サア、暗がりでする商ひなれば、器量に寄らぬ。男は甘いものなれば、床へ這入つて念仏を申すにも、鼻

「ハイ、舞ひまするでござりませう」

と、声張り上げ、

「徳若に御万歳、愛敬ありける新玉の、べれべんがべれくべん、べれべんがべれくべん、べれくべんのべつとこさ、べれべん、べれべん、べれべんくくくくく」

「ア、舞はんせぢやない、買はんせぢやはいな」

「ハアこりやごなたは惣嫁ぢやの、エ、旦那衆と思ふたれば、惣嫁でも愛敬のない顔で、一日あたふた舞ふて、儲け貯めたこの銭を、そつちへせしめうと仕らるゝは、誠に野太う候ひける。こんな所に、べれべんがべれくべん、べれべんがべれくべん、べれくべん、べれくべん、べれべんく、ヤべらつかうより早う去ぬるが、徳若に御万歳」

と、袋担げて逃げ帰る。

後へ肩臂いかつい風、気儘浄瑠璃出次第に、「貞光は信濃の国碓井の生まれ、綱は武蔵の三田の者。さて公時は伊豆の国とは申せども、生所も知れ

声でぶつくと言へば、『よいかく』と根問ひして、毎晩々々付け打つて遊びに来る」

と、年寄り惣嫁の伝授事。

屋敷の内より仕事仕舞ふて日雇手伝ひ、

「ハア、もう色共が出掛けおつた」

「持ち合はせがあるならば、誓願寺の竹田見ると思ふて、十文がの買ふもの」

「オ、いしこ。毎晩々々なぶつてぢや、ちやつと去んで銭の出ぬ、お方を抱いて寝やしやんせ」

「テモゑらい臆な惣嫁共」

と、鋤鋤背負ひ打ち担げ、皆散りくに行く後に。

一人の手伝ひ立ち戻り、そこら見廻し懐より、状箱取り出し、人の見ぬ間に捏ね土の、中へ手早く押し込んで、何の合図か白紙の、目印立て、立ち帰る。

伏見戻りの万歳が、鼓片手に米袋担げて帰るを

「万歳様、万歳様」

と呼べば

呑み込む早合点、

「ず宿なし」

と、みすく見へる空騒ぎ、

「ホウ、今夜は暇か。お百、遊んでやらうかい」

「エ、悪口ばかり言はずとも、あるなら遊んで」

「ヤア、わりや俺を見立てたな。コリヤわいらを買ふ程は、片側な所で拾ひ子をして来た」

「そんならごんせ」

と大工小屋、鉋屑の敷布団、

「ドリヤ暖まらうか」

と連れて行く。

お君は一人ほつしりと、

「ハア、儘よ。出舟があれば入舟も、あるが浮世の習ひもない。かけにはならぬ」

と床の内、

わつばさつばと喚く声、

客は手に紙持ちながら、一目散に駆け出だせば、お百は帯を下げながら、着物ほらく走り出で、

「あられもない物盗むから、何盗もうも知れまいぞ。

おのれが親にも持ちそなものを、喰ひ逃げする卑怯者、返せ、戻せ」

とちやり仕舞ひ、後は笑ひになりけり。

夜も早五つ、宵は人目を忍びの勤め、形と所体は黒白の、雪に上着の黒木綿、顔は殊更十文の、惣嫁に惜しき器量なり。

「オ、雪降りて冷えるのに、内の坊に乳吞まして、今夜は休みやさんせいで」

「サア、そう思へど出ずにゐれば、何やらかやら足らぬがち」

「なるほどそうあるう。したが今夜のまんも知れた。

この小女は売れもせず、まん直しに一服せう。お君殿、サアござれ」

と、二人打ち連れ普請場へ、入るさの月も雪空に。

二つ齒履いて来る足音、

「好い客そうな」

と立ち寄つて、

「申し、お遊びなされぬか」

客もおろくく目を擦つて、

「ア、ひよんな所へ来て、悲しい話聞きました。幸ひこゝに持ち合はせた金二歩、不足にあらうがどうぞして、これで二人の病人を介抱してやらつしやれ。疱瘡も山を上げ兼ねるなら、有り合はせた一角、明日の夜持つて来ませう」

と、金を渡せば

押し頂き、

「お客様はこの御恩」

と、手を合はすれば、

「ア、コレく、礼には及ばぬ。俺も小さい子がある故、身につまされて進げる金。今夜は雪も降る程に、早う去んで疱瘡子に、乳を吞ましてやらつしやれ」

と、つどくくに心を付け、金遣りながら手も握らず、涙こぼして帰りける。

御手洗の、水の流れと人の身は、浮かぬ沈みは様々に、河原伝ひに来る非人、人絶え待つてそろくくと、『紙の印はこゝこそ』と、捏ね土に埋んだる以前の状箱掘り出

「いやく、俺はこなた衆を買ふて遊ぶ者ぢやない」
「されば、私も左様見受けました故、御仁体を見掛け、ちとお頼み申したい」

と、恥づかしそうな物腰も、顔も姿も十人並み、

「こなたは内が術なさに、忍んで勤めするのぢやの。

ア、笑止なことぢやのう。それならば遊びませう」

「それはまあくお嬉しや」

と、伴ひ這入る番屋の内、太鼓枕の起臥も、これも世に住む憂き身かや。

客も

おりゑも、割膝にて、

「『ちとお頼み申したい』と申すは別のことならず。

私には夫のある身、稼ぎのために旅歩き、年寄られた

舅御の長々の煩ひに、一人の子が重い疱瘡。貧しい

暮らしに二人の介抱、それ故私もこの勤め。何とも申

し兼ねたれど、どうぞ枕を交はさずと、親子四人助か

る様に、お情け頼み上げます」

と、顔も得上げずしやくり上げ、涙と共に頼むにぞ。

して。

面桶の底へ手早くも、鉞追取つて掘り返す、河原の砂も身に掛からぬ、おりゑが見るとも

したんだる薦包み、埋み隠すを

『盗んだ金』と見るおりゑ、

小屋の内より出る惣嫁に

驚く非人は素知らぬ振り、

「下んせく、下さりませ」

と、面桶担げてのつさのさ、河原を上へと行き過ぎる。

またひとしきり降る雪に、濡れしほたれて浮橋も、転け

つ転びつ走り着き、

「申しく、見りや皆様もこの河原で勤めなさるゝ女

中そうな。私は祇園町辺で浮橋といふ勤めの身、様子

あつて内を出で後より追手の掛かる者。見付けられた

ら死ぬる覚悟、お前方の情けにて影を隠して下さん

せ。アレくあの提灯が、わしを尋ぬる人そうな、皆

様頼み上げます」

と、言ふより他は涙なり。

「オ、よしく、氣遣ひさしやんすな。勤めする身は相互ひ、わしら二人が匿ひましょ。ガどこがよからう、どうせう」

と、言ふ間程なく

追々に、駆け来る祇園の茶屋入方、提灯手ん手に、

「ア、コレ色達、今こゝへ年の頃は十八九な女郎、色は紫、江戸棲の着る物着て、この道筋を来なんだか」

「イエ、宵からこゝにゐれど、そんな女子は、ノウお君殿、さつきにから見やせぬな」

「テ面妖な、どうでもこゝへ今来た筈」

と、傍に隠れてゐるぞとも、

白雪踏み立て男共、

「ア、コリヤ、この普請場が氣ぶさいな」

と、弓張先に丸太の蔭、鉋屑まで探せども、

「こゝには見えぬ」

と駆け出づれば、

お百は亭主にわゝりかゝり、

「コレナお前方、あの小屋はわしら寝所。断りなし

悦ぶ浮橋

番小屋より、そろく出でて顔と

顔、

「ヤア、お前はおりゑ様」

「そう仰るはおむつ様、これは」

と焚火打ち消して、顔も得上げ袖覆ふ。

「ム、お前方は近付きそいな」

「アイ、久しう逢はぬお方、ちと話したいこともあり。お百さん、待たずと去んで下さんせ」

「そんなら先へおりゑさん、また明日の晩、さらば

え」

と鼻歌謳ふて

「アイナ」

「アイナ」

帰りける。

人絶えすれば浮橋は、おりゑが傍へ差し寄つて、

「マア何から言はうやら、聞きたいはとゞ様の病

氣、母様は長々のお氣遣ひでお疲れはなされぬか、太

に家探して、ゐぬでは済まぬ。勤めに高い低いはないぞえ。粹な商売してゐながら、苦界する者潰さんすか。それでわしらが立ちませぬ」

と、白粉のへげる程、つら膨らして捻ぢ掛かる。

「これは尤も誤つた。氣の急ぐ儘に断らぬは、おいらが不念。イヤこれく、不足にはあるけれど、二人の中へ遣ひ銭、マころりと去んで寝て下され。サアこれからは高瀬の方を、尋ねて見よう」

と打ち連れて、河原を西へと駆けり行く。

「さつてもひやいや。つい後に隠して置いたに、うつ

そり共。したが宵から銭見なんだに好い仕合はせ。お

前も仕合はせ、サアこゝへ」

と、言へど

浮橋、身は冷や汗に冷え凍え、寒さ怖さに震ひゐる。

「オ、寒ござんしよ。わしらが仕付けた勤めでさへ、

この雪では堪らぬ」

と、小屋の木屑を取り出だし、火打ちかちく、吹き付け

て、松梅ならぬ白人に、焚火をあてる深切を、

と、かきたくる程問ひかくれば、

「アイ、皆様は変らねど、変つたはお前の身の。屋敷奉公と思ふたに、こりやどうでござんすえ」

「サイナ、とゞさんの長の御病氣、兄重太郎様はお国の騒動からお帰りもなされず。お前も兼々知つての通り、常に不自由なその上に、薬代の何のとて、いかぬ世帯を見る悲しさ。とゞ様には深う隠し母様と談合して祇園町へ勤め奉公。わしは独り身、お前は現在兄さんといふ殿御持ちながら、見れば、さもしい河原の勤め、とゞさんや母様は知つてござつてなさんのか」

と、問はれて

おりゑは差し俯き、恥かしいと悲しさと、暫し詞もなかりしが。

「祖父様は長の煩ひ、かてゝ加へて太市郎は重い瘡、祖母様独りうろく」と世話なさんゝが愛しぼく、

ほんにさもしいことながら、祖母様もこのりゑも毎

夜々々帯締めて、寝た夜は数も限りもござんせぬ。あ

んまり見る目が悲しさに、夫へ立たぬと思ひながら、帯を解かぬが私が潔白。太市が瘡瘡の願込めに、祇園参りと偽つて、毎晩々々の河原へ、身は穢さねど心を穢し、わづかなお足を貰ひ貯め、貧苦を凌ぐ私が心、推量して下さんせ」

と、声をも立てず締め泣きに、嘆けば共に浮橋も、身の悲しさを数へ立て、手に手を取つて諸共に、涙の袖は加茂川の、なほも流れの身とならん。

浮橋やうく涙を留め、

「私も不思議に殿様の弟御、縫之助様にふと馴れ初め、言ひ交はせしことまでも、反古となつて逢はれぬ品。それ故に若殿の後を慕ふて今宵の駆け落ち」

「エ、それは聞き捨てられぬお前の身の上、こゝは往来、五条に私が知辺あれば、何かの話はマア後に、追手が戻つて見たれば難儀」

「サア、それ故私も心が急ぐ」と、互ひに帯を締め括り、

「イヤくくく、金輪際離さじ」

と、共に引き合ふ雪明り、互ひに見合はず顔と顔、

「ヤア、女房か」

「重太郎様か、ハア恥づかし」

と一散に、闇はあやなし

喜内住家の段

昔は馬に鞍馬口、今は妻子の飼料も、かつくなりし素浪人、矢間喜内が老ひ病ひ、重きが上に瘡瘡子の熱の差し引き腕白も、常よりいとゞいぢらしく。

近所の見舞ひ、相借屋の洗濯婆様、

頬赤き猿廻しの丹兵衛、

茜屋のお内儀まで、紅絹の衾付き賑はし。

「オ、どなたもくいかいお世話」

「オ、婆様嬉しかる。始めの間は悪い腫物で皆きつう案じたが、モウこつちのもの。神様も機嫌よう今日で

非人が埋みし砂の中『心憎し』と目印して、五条わたりの軒の妻、裾もほらく走り行く。

時々廻る番人の、屋敷のめぐり拍子木の、音も冴え渡る夜風に、

連れて降り来る雪日和、積もること共話し合ひ、帰るおり多は見覚えの、河原はそこかかしくかと、うろくに見廻る内、有り合ふ鍬にて掘り返す

土は白妙吹雪の波、なほ降りしきる雪霰、

『人の見ぬ間』と掻き除くる、雪も我が身の罪科も、積もらば積もれ『金ぞ』と見たる身の慾心、急ぎ立つ心も鍬の刃も、念力通つて掘り当たる。

それと見るより以前の非人、

「ヤアその薦包みを取らうとは、野太い女」

と突き退くれれば

また取り付くを

引手繰り

縫り付くを

蹴飛ばしく

お立ち」

「ソレく、イヤまた神様もこんな不自由な所に長居はなるまい。アノ喜内殿も長い病氣。ありや貧乏神の神送りせずば治るまい。知行取りの果てぢやとて、この様に無商売では済むまいぞや。いつそあの瘡瘡子連れて、橋の上へでも出やしやつたら、よい知行に有り付かうに」

「ア、コレ丹兵衛様の滅相な。おり多さんといふ我勢な嫁御が控へてぢや、サアくもう帰りましよ」

「オ、そうせう。コレ婆様、瘡瘡見舞ひの持遊びは、必ず捨てずと人形屋へ、下ろして小遣ひの足しにさつしやれ」

と、念頃ぶりに氣を付けて、皆々打ち連れ立ち帰る。

加茂川も、井路の小川も月宿る、流れは同じ二人連れ。

おり多は門口差し覗き、

「嬉しや、誰もないそうな、サアござんせ」

と、手を取りしが立ち止まり、

「おむつ様、頼むことがあるはいな。私は昨夜祇園様

へ参るといふて出た程に、アノ、七条の河原にみたといふこと、舅御やかゝ様には必ず言ふて下さんすなえ」

「アイく、ほんに私も頼みがある。とゝ様御浪人の後、一文字屋へ売られて浮橋といふことは、かゝ様一人の御了簡。物堅いとゝ様には深う隠して、屋敷方の奉公といふてごんす。必ず沙汰なしに」

「オ、そりや合点ぢや、したが風俗なら詞付きなら、そのびらしやらでは、つい尾の出そうなことぢやぞえ」

「イエく、そこはぬかることぢやごんせぬ。とゝ様に逢ふたら前の様に、随分堅う三つ指と思ふてゐながら、廓の癖が写つたは堪忍しえ」

「ア、コレ、その『堪忍しえ』がもう悪い」

「オ、ホゝゝ。ホンニ嗜むといふ下から、口が滑つて、オ、笑止」

と、笑ひ綻ぶ梅花の口、堅く閉ぢたる障子の内。咳きの声諸共に、父の喜内、枕を上げ、

「嫁、戻りやつたか。孫めが待つてゐつらうに、早う帰りはしやらいで」

「アイく、そう思ふて心急ぐ道、おむつ様に出合ひ、何やかや積る話で」

「何ぢや、娘が戻つた。ヤレく久しや、どこにゐるぞ」

「ハイ、こゝにをります。とゝ様、喜内様、お氣もじいかゞ、お伺ひに参じましてござりまするでござんす」

と、折目高なる武家挨拶も、どこやらしどけ艶めける。

声聞き咎め母は立ち出で、

「ヤアおむつ、何としておぢやつた」

「サイナア母様、あんまり懐かしさに勤めの中をやうくと、イエ、サア、屋敷の勤めの中を、暇貰ふて参じました」

「成程、そなたの勤めてゐやる屋敷は堅い屋敷ぢやと聞いたが、ついその様によつ出られたの。髪形も美しく立派なを見るに付けてもいとゞなほ、心の苦勞が思

と氣を付けられ、

「ハイ、取つてあます。誠に久々のお疾ひに、このうお寡れも遊ばさず、御機嫌よいお顔を押し、眞実誓文悦ばしう存じまする」

と、述べければ、

喜内何の氣も付かず、

「ア、同じ屋敷奉公ならば、先君のお傍仕へもさせんずもの。御家は没落、我れは長病ひにて行歩叶はず。倅重太郎、いづくに彷徨ひゐることやら。まだしも老いの楽しみは孫の太市、疱瘡も山上仕舞ふたれば、大役済んだ出かしたな。見やれ、賢い目元でないか。さすが侍の子とて、疱瘡の中でも浦島やお山形の塗つた物は大嫌ひ、公平の人形の顔の赤いは腫物の薬、あつばれ功の兵になり兼ねる利口者」

と、子よりも孫に余念なき。

「オ、可愛そうに。したが今年は並がよいげな。好い時美しいこと仕やつたの。ほんにマアおり多様、この様な疱瘡子のあるのに、毎晩々々よう日参さんすの

ひ遣らるゝ。聞けば、嫁女と連れ立つて戻りやつたげなが、道で今逢やつたか」

「アイ、タベ河原で」

「ア、コレおむつ様、いかにも変らぬ無事な顔を見たも、毎晩私が日参する、祇園様のお引き合はせ」

「オ、それく、祇園様のお社で、それはく難儀なことがあつてな」

「ム、難儀なことゝは、悪者にでも追はれてか」

「アイ」

「イ、エイナ、ありやおむつ様の言ひ様が悪さ。難儀といふはな、道中で俄か雨、イヤ雨ではない、ア俄か雪でな」

「アイく、その雪に合ふてはならず、隠れう所はない。幸ひの材木でもない鳥居の蔭に、お前が日参してごんした。いかにお世話でどうやらかうやら、御恩はきつと忘れぬぞえ」

「ア、コレ、私への御挨拶より、父様のお傍へ往て、ソレ、行儀な屋敷の式作法を、ナ、お話しなされ」

う

「またかいな、そんなことわしや聞きたうない」と、ひやく／＼思ふ兄嫁に

言ひ損ひの機嫌取り、

「ドレ坊、抱いてやりましょか。伯母が着物も赤ぢやぞや。サア赤いはよいが、しどのないのに困つた」と、疱疹の禁句くろめ兼ね、是非も

納戸へ連れて入る。

弓矢は家に伝えても今は仕へん、君知らず。

羽なき矢間重太郎、羽織袴袴大小も、昔に返る立派の骨柄。

「頼みませう」

と家来が案内、

「おりゑ、誰やら見へたぞや」

「アイ」

と何気も懐かしい、夫の顔に『ハツ』とばかり、出て逢ひたさも面目涙、胸に瘡の上り口。

「何をうち／＼してゐやる。どなたぢやこれへ。ヤア重太郎か」

「母人、まづは御健勝で」

「ヤレ、その挨拶はゆるりと。マ、マア内へ這入りや。よう戻つてたもつたの。何やかや話すこと、アノ坊が疱疹しての。コレ嫁、抱いて来て顔見しやいの、何をうつとりしてゐやる。ム、余り嬉しさに氣上りがしたの。ソレ茶も汲んでおぢやいの」と母の悦び。

「イヤ／＼、お構ひ下されな。ヤイ関内、身も隙は取らぬ、暫くの間旅宿へ往て待つてをれ。何か差し置き親人の、御機嫌いかど」

と、手を付けば

喜内にもこ／＼、打ち微笑み、

「浪人の尾羽を枯らし、旅寝れもさぞあらんと思ひの外、顔色も健やか、衣服の美々しさ。ア、変らぬ体にまづは安堵」

「ハハ。なるほど、その御案じも御尤も。拙者も

方々とうろたえ、この儘に朽ち果てんかと存じたに、未だ武運尽きず、よろしき主取りを仕り、ご覧の如く、身の回りも主人より拝領。すなはち旦那の御供致し、鎌倉へ罷り下る。折から親人御病氣の様子、承つて心ならず、立ちながらちよとお暇乞ひ。二親を預り長の月日、さぞ女房も心遣ひ、過分、過分」と、常に変らぬ夫の顔色、

機嫌良いのも疵持つ足の、裏ではないかと案じゐる。

喜内膝行し、膝立て直し、

「ム、奉公の口あつて知行に有り付いたとな。ヤイ重太郎、女は二人の夫を持たず、侍は二人の主に仕ゆるを、人非人と卑しむこと、母の胎内を出づるより、腸に沁み込んであること、わりや忘れたな。

ア、その根性とは知らず、妻子を捨て親を捨て、再び家に帰らぬは、『あつばれ倅は武士なり』と心の自慢。親の病氣の見舞ひに来たさへ不覺者と思ひしに、二君に仕へて、その腐つた魂の大小をひけらかしに来たか。コリヤこの喜内はな、貧苦には迫つても重代の

と、老いの怒りの一筋も、『もし、我がことを知つてか』と、女房が胸も二つ玉、はたと立て切る一間の内。

思案を極め重太郎、

「お暇申す」

と立ち上がる、

「ア、コレ待つてたも。なんぼ親でも今の悪口、腹の立つは道理々々。没義道なは日頃の氣質、そなたの有り付きも孝行のためぢやもの。あゝ言はしやつても底心に、何の悪う思はしやる。何事も了簡召され、ヤア」

「イヤサ、拙者も急の御用、隙取らば主人へ不忠、罷り帰るこの後は、最早お目にも掛かるまい」

「ハテ気の短い。急ぎの用なら止めはせまいが、わりない無心があるわいの。そなたが他国召さつた後は、何を活計に、世を渡らうあだてもなし。道具諸色も売り払い、やうく嫁女の賃仕事や、乳呑み子抱へて人に雇はれ、それはく憂き艱難、口で言ふ様なことぢやない。喜内殿の病氣の上に孫が痲瘡、人參と熊膽で仕立てにやならぬ煩ひに、常の薬の才覚さへ石で手詰めた貧の病ひ、旅の遣ひは有り合ひとやら。親子の中でも金銀の無心はどうやら言ひ難けれど、ノウ嫁女」

「アイく、モ余所外のことではなし、主ぢやとて何の否がござりませう」

と言ふを
打ち消し、

「テサテコリヤ何を言ふ。最前御老人の詞何と聞く。親子の縁はもう切れてあるわい。尤も路銀は貯へたれども、主人より頂戴の金子、一錢も貢ぐことならぬ。ア、ア、嬉しや、今日といふ今日、厄介を払ふ

「コレ太市、ソレと様が戻つてぢやわいの。オ、抱かれたかろ、抱かれたかろ。何ほ抱かれたうても、と様は抱きやさしやんせぬ。侍の立たぬと言はしやんすも、なるほど無理とは思はねど、腑甲斐ない女子の手一つで、御宿老のお二人に、御不自由な目がさしともなき。色々様々に身を碎くはナア、大概お前も推量してくれたがよい。身に曇りが言ひ訳がしたうても、どうもならぬ。腹が立つなら堪忍して、太市は可愛うないかいな。お前ばかり出世して、子は餓えても構はずか、辛い貧苦を少しでも、思ひ遣りがあるならば、三つ四つの重ね着を、一重は脱いで朝夕の、煙の代にと仰つても、さのみ惜しうもあるまいに、余り酷い愛想尽かし。さほどつれないお前でも、この子が親と思へばこそ、毎晩熱のうは言にも』と様呼んで』と泣くわいの。コレ、胴慾な父御の傍へ往て、母が詫言してたも」

と、押しやれば
這ひ下りて

て心がさつぱり、義理もへちまも一本立ち。女房、そちにも隙くれた、イヤサ驚くことはない。科の子細を言ひ聞かせば、かへつて身が武士が立たぬ。他人に何にも聞くことない」

と塵灰付かねば
母親は、顔打ち眺め、

「これはまた、きつい思ひ切り。尤も父御へ不足はあらう、ガ嫁に何の科がある。そう言はずと、機嫌直してどうぞ今日一日逗留したも。コレ嫁女、止みやいの。エ、マ気の付かぬ」

と、様子白髪の

気を汲んで、涙片手に夫の傍、水の出端へ茶の花香、そつと差し出す追従も、

身を捻ぢ向いて皺顔、

取り付く島もないぢやくり、詮方なさに幼子を、抱いて出でて

見たばかり、

愛想なければ、恨めしげに、

「と様、ノウ」

と縋り付く

恩愛血筋の一声は、名作の鋒に切り付けらるゝ如くに、鉄石の様なる重太郎、涙を堪へ兼ねけるが。

気を取り直し突き退けて、

「親のことさへ思はねば、まして倅がこと何とも思はぬ。縁切つて仕舞ふたれば、薦被らうが餓えうが、

ア、この方に構はぬこと、くどう言ふな」

と睨め付ける

母は興醒め、

「コリヤ重太郎、さてもく今までは、またとない孝行者と思ふたが、貧しい親を見限つて、一人栄華をする気ぢやな。エ、見違へた道知らず、浪人すればその様に、さもしい心になるものか。望みの通り親子でない、勝手次第に出て行きをれ。子と思はねば恨みはないが、天道様のお憎しみで、身の行く末が思はるゝ。

エ、浅ましい、人でなし」

と、煙管打ち付け声震はし、

「アノ畜生に構はずと、嫁、こちへおぢや」

とばかりにて、恨み泣くく立つて行く。

返答もせず表の方、出で行く袂を

女房引き止め、

「去られた夫を止めはせぬ。ガ出て行く気なら、この子を連れて行かしやんせ」

「ヤア戯け者、去つたからは子ではないわい」

「イヤくく男の子は男に付く世間の大法。水仕奉公してなりと、お二人を養ふに、この子があつては枷になる。せめて庖瘡子の介抱は、親の不肖ぢや、さしやんせ」

と、門へ突き出しびつしやりと、さすが気強う言ひながら、戸の隙間より差し覗き、

「コレ、それが迷惑なら、今一度思案仕直して、立ち戻る気はないか、心強や」

と、かつばと伏し、声も得上げず忍び音の心奥より父の声、

『おり多、おり多』

と呼ぶ声に、

「アイ、アイ、そこへ」

と言ひながら、我が子に名残り後ろ髪、せはし泣く間も姑が

『嫁女、嫁女』

に是非なくも、思ひ切つてぞ奥へ行く。

さしも義強き重太郎も、我が子の枷に縛られて、行きも得やらず抱き締め、気は暗闇となりにける。

折からすたくく急きに関内、

「余り時刻が延びますから、大鷲様、小寺様、粟田口まで早や御立ち。拙者も御両人の御供、不躰ながら

お先へ参る」

と言ひ捨て、引返す、

「南無三宝遅れしと、朋輩の嘲り何とせん」

と、顛動散乱、

納戸口、病ひの床を這ひ出づる、父の喜内が探り足、隔てぬ中の内と

外、太市郎が肌押しくつろげ、口に称名手に小柄、胸

を極めて眼を閉ぢ、突込む鋒

幼子の、たゞ一声に息絶ゆる、

死骸と共にどうど座し、泣く声一度に

父喜内、

「重太郎、出かした」

と、わつとばかりに噎せ返る。

『ハツ』と驚き立ち上がる、

「ヤレ待て暫し」

と戸を開き、

「古主のために親を捨て、現在の子を手に掛くる、その丈夫な魂では、敵師直を討ち損ずることあらじ。オ、それでこそ我が子なれ、あつばれ忠臣出かしたり。忠義の旅の餞別せん」

と、懐中より金子取り出だし、

「コリヤこの金はな、主君御生害と聞くより、直にかの地へ駆け付けん、旅の用意に貯えしが、計らず老病指し発り、空しく引込みありながら、この年月の貧苦にて、たとへ餓え死するとも、忠義の金には

手を掛けまじと、女房嫁にも隠した路銀、サ御用に立

ちやれ」

と投げ出だせば

重太郎飛び退去り、

「ハ、割符を合はす忠義は一体、拙者もこゝに五十両。この金は大星殿より配分の用金、私事には遣はれずと、母にもつれなくもてなせしが、父の心を込められしその金子を申し受け、肌身に付くれば親人も、敵討ちの御供ぞや。またこの金子は御老体へ拙者が寸志の置き土産、倅が追善仏果のため、お頼み申し奉る。さてもく武士の、義理程辛きものはなし。連判の侍、小寺、大鷲、拙者など、かの師直に好みある薬師寺が城中へ、或いは日履、乞食に身を賣し、鎌倉の様子聞き繕ひ、大星殿へ日毎の内通。親妻子にも語らじと、誓紙の手前母人にも、包みし段は真平御免。大事を抱へて故郷へ帰る不覚者と最前の御異見肝に銘ぜし故、手に掛けし倅は主君の追腹、未来の先陣よくしたな。追付け敵を討ち終せ直様切腹仕り、冥途

より吉左右を申し上げ、親仁様」

「オ、必ず待つてゐ申す」

と、親子手に手を取り組んで、思はず知らずはらくと、嬉し涙の暇乞ひ。

障子の内にも『わつ』と泣く、声にびつくり立ち退けば、

「ノウ重太郎、女房子にも隠す大事、母も出まいと思ふたれど、おりゑが自害、おりゑが自害しやつたわいの。死に顔に一目暇乞ひ、それ程のことは不忠にも、わしやなるまいと思ひます。おむつ、こゝへ」

と二人して、昇いて出でたる亡骸に、書き残したる藻塩草、

浮橋取り上げ涙ながら、

「エ、』と様かゝ様へ申し残し参らせ候。先立ち候ふは不孝に候へども、夫の心底立ち聞き致し、恨みは晴れて、この身の申し訳立ち難く、これもお二方お貢ぎのため、浅ましい立君の世渡り」

「ヤア／＼そんならアノ親仁殿の介病に、賤しい辻君

の勤めまで仕やつたか、賤しい辻君の勤めまで仕やつたかいのう」

「エ、』往来の人に合力を受け、肌身は穢さず候へども、夫の疑ひを受け、これのみ迷ひの種になり参らせ候。分けて悲しきは太市郎、疱瘡も落痂口になり、悦ぶ甲斐もなき別れ」

「ア、道理々々、生長ある子を殺して、何の生きてゐる心があらう。可愛や、可愛やな」

「エ、』一つ、今朝買ふて帰り候ふでんぶの曲物、膳棚に御座候。と、様の菜のものにお上げなされ下され候。一つ、裾の切れし私が裕、坊が余所行きに縫ひ掛け置き候ふが、心掛かりに候ふ儘、死骸に着せて、御葬り頼み上げ参らせ候。御介抱申す人もなく、御不自由の程いかばかり悲しけれども、一時も早う冥途の殿様に、夫の心底申し上ぐるを樂しみに相果て候。重太郎殿へは面目なさに、何事も書き残さず候。めでたくかしく」

の終りまで、夫に立つる真実の、

『またと類ひもない貞女を、一日安堵の思ひも無う、辻君とまで身をなして、朽ち果てさせし可愛や』

と、空しき死骸に抱き付き、前後不覚に取り乱す。

喜内涙を押し拭ひ、

「主人のためなればこそ、傾城となり非人となり立君となる心遣ひ。かほどの忠臣重太郎を子に持ったこの親仁、我れもちつ共悲しうない。死しての後の名こそ惜しけれ。祝ふて目出度う別れの盃、お婆、注ぎやれ」

と取り上げて、奥歯漏れ来る謡ひ声。

「実に名を惜しむ弓取りは、誰もかくこそあるべけれ。ヤアあら優しの我が子や、健気や」

と、泣かぬ顔するてゝ親の、にこ／＼顔もこの世の名残り。

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハア、仰せにや及ぶべき。我が子の絆しを切つたれば心の鉄石十倍増し。主君の敵のその上に、妻の敵子の敵一時に討つ門出でと、思へば心に勇みあり。たとへ天地を駆けるとも、念力通つ

て師直が首引提げんは瞬く内、早やおさらば」と立ち上る。

右 「もうお往きやるか。やがて目出度う、吉左右、吉左

その吉左右とは愛し子が、命を捨てに行く旅路、冥途の案内は嫁と孫、三途の川を急ぐらん

可愛と見遣る野辺送り、今朝は祝ひし神送り門に捨てたる狸々も、涙の種の笑ひ顔
萎れ、勇んで出でて行く